**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５０回　（２０１８年１２月１１日）**

**・第５０回の勉強範囲：「第二章　信者たちとともに」２５、２６頁**

**本文の日付訂正**

日付が４月９日のプラーノクリシュナ・ムケルジーの家に行くという内容は、正確には４月２日の冒頭です。その次に、実際に４月２日の部分に書かれているケシャブ・チャンドラ・センの家（リリィ・コテージ）に行く箇所がきます。　これが正しい４月２日の順序です。　4月9日の記述はありません。

『福音』の作者であるMさんは５巻の『福音』を作りましたが、日付順に１巻ずつ書いたのではなく、同じ日付の内容を別の巻にも書きました。のちに英語への翻訳者のニキラーナンダジは、すべてを日付順に直し１冊の英語版にまとめしたが、その際にすこし日付のミスが起こったようです。日本語版は英語版から翻訳をしていますので、英語版に準じた日付になっています。英語版のさらに後に編纂された新たなベンガル語版は、たくさんのお坊さんがよくリサーチをして日付順に直したので、日付が正確です。

この部分は次回に改定版を出すときに、変更をしてください。

第４９回では、このいばらの茂みのような世界で生きていくには、祈りと高徳の人と交わりが大事。高徳の人と交わることによって神への渇仰心と愛が生まれる、ということについての説明がありました。（編者）

お坊さんの生活を通して霊的な実践のやり方を見て、それを自分でも実践することが大事だ、という話をしました。お坊さんにできて信者にできないことはないですね。問題なのはやる気です。「時間がないから、今日は瞑想や勉強をやめておきましょう」という考えがすぐに浮かびますが、どれくらい長く実践をするのかは問題ではありません。時間の長さではないのです。時間がなければ、聖典を２，３行読むだけでも構いません。

必ずそれをタクールが見ていますから。私たちからタクールは見えませんが、絶対にタクールは私たちを見ています。そして少しの時間でもいいから実践を続けると、だんだんと神様中心の生活を送ることができるようになります。朝一回座るくらいでは、神様を中心にするのは無理です。一日もやめないで少しでも実践する。例えば、朝と夕方に座わり、ときどき協会に行ってお坊さんのやり方を見ます。それがホーリー・カンパニーのひとつのやり方です。百聞は一見に如かず、実際に神様が中心の生活をしているお坊さんのやり方を見ると、その影響は大きいです。結果が出ます。

**・📖読み『福音』２６頁上段L９～下段L３**

*もう一つの方法がある。熱心に神に祈ることだ。神はまさにわれわれの身内でいらっしゃる。われわれは、彼に『おお神よ、あなたはどのようなお方なのですか。御自身を私にお示しください。あなたは私にご自身を見せてくださらなければいけません。そうでなければ、あなたはなぜ私をおつくりになったのですか』と言うべきなのだ。あるシーク教徒が、ある時私に言った、『神はお慈悲に満ちていらっしゃいます』と。私は言った、『だが、なぜを慈悲深いなどと言わなければならないのか。はわれわれのつくり主なのだ。彼がわれわれに対して親切であったとてなんの不思議があろう。両親は彼らの子供たちを育てる。それをお前たちは親切の行為だなどと呼ぶか。彼らはそうするのが当然なのだよ』と。それだから、われわれは自分の要求を神に押しつけなければいけない。は、われわれの父母ではないのか。息子がもし世襲財産を要求して断食でもするなら、たとえ法の定める時期の三年前であっても、親は彼の取り分を渡すだろう。あるいは、子供が何パイスかを母親にねだってくり返しくり返し、『お母さん、二パイスでよいからくださいな。このとおりひざをついてお願いします』といえば、母親もこの熱意を見て耐えられなくなり、お金を投げてやるのだ。*

（解説）

私が子供のころは、親はとてもお金に厳しかったです。ちょっとしたお菓子が欲しくても、何度も何度も熱心におねだりをしないと買ってくれませんでした。

1. **神様への渇仰心(yearning)**

**（１）神様を愛すると、神様に対する渇仰心が生まれる**

渇仰心(yearning)という言葉は『福音』の中に何回も出てきます。ベンガル語ではビャクラタ（byakulata）と言います。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

Q　&　A

Q：「yearningという言葉の持つイメージはthirsty(のどの渇き)のようなイメージでいいのでしょうか？　日本語訳には、thirstyのイメージのある『渇仰心』と、もうひとつ『あこがれ』という翻訳も使われていますが、『あこがれ』だと、イメージがつかみにくいと感じることがありました」

Ａ：「yearningはthirstyのイメージが近いので、渇仰心を使うほうがいいかもしれません」

Ａ：「チャタク鳥はスワティ星が昇るときに降る雨しか飲まないので、スワティ星が昇るときに降る雨を待って、空を仰ぎ続けます。タクールはチャタク鳥の例を使って神への渇仰心の話をしました」　　☞（『福音』２７３頁上段L１４~２０、『生涯』下巻４２１頁（４８）参照）

Ｑ：「この場合の渇仰心はムムクシュットワと同じですか？」

Ａ：「ムムクシュットワはムクティ（解脱）への渇仰心、願いです。それ以外には使いません」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

渇仰心はとても大事です。たとえ朝夕２回お祈りをしたとしても、それをただの日課として機械的にこなすだけでは、霊的にはなれません。神に対する渇仰心をもって祈ることが大事です。それにはまず神様を愛さないと、神に対する渇仰心は出ません。毎日のスケジュールに祈りを入れることは、何もしないよりは絶対にいいですが、本当に霊的に進みたいなら、朝から夜までどのようにすれば神様とつながっている状態になるかを考えることが大事です。

皆さんは「カルマ・ヨーガをしているので、仕事をしているときは神様とつながっている」と思うかもしれません。しかし、本当の意味でカルマ・ヨーガをしている人というのは、

・仕事は神様を喜ばせるためにし、・神様の力で仕事をしていることを自覚し、・仕事の結果は神様にお任せしています。皆さんは、カルマ・ヨーガをするときに本当に心の中でそのように考えていますか？　もし、心にこれらの考えを持たずに仕事をすると、うぬぼれ、嫉妬、名声欲　などが絶対に出る可能性があります。

働く人には3つの種類があることを別の講話で言いました。　①自分の欲望を満足させるために仕事をする人をプラクリタと言います。プラクリタに高い目的は全くありません。普通の人はほとんどそうです。②少し高い目的を持っている人、例えば、もっと心がきれいになりたい、人のために協力をしたい、もっと神様のことを考えたい、と考える人をカルミーといいます。カルミーは、ある時はこれらの高い目的を思い出しますが、忘れることもあります。③神様のことを常に思いながら、自分の高い目的を忘れずに実践するのは、カルマ・ヨーギーです。カルマ・ヨーギーは最終的に悟るに至ることができる段階です。

（インド大使館ギーター201812参照）

われわれは「カルマ・ヨーガをしている」と言いますが、われわれのほとんどはカルミーです。カルマ・ヨーギーではありません。それだと霊的に進むことはできません。

**（２）神様への渇仰心が生まれると、神様が自分の中心になる**

渇仰心を生む原因のひとつは困難です。失業すると仕事を渇仰し、子供が病気の時は治療薬を渇仰するように。しかし「困っているときにしか渇仰心が出ない」、と考えるのはネガティブです。渇仰心を生むにはもう一つ方法があります。

先ほども言いましたが、愛することでも渇仰心が生まれます。例えばお母さんが息子を愛していると、いつも息子に会いたいと思い、息子のことを考えて、息子に対する渇仰心が自然に芽生えています。母の息子に対する愛のように神様を愛すると、神様に会いたいと願いが出て神様のことを考え続ける結果、渇仰心が芽生え、神様が自分の中心になります。

**神様が人生の中心になった人の例**

1. **スワーミージーの例**

スワーミージーは、講話の時はアドヴァイタ、アドヴァイタと言っていましたが、個人的な話の時はいつも、シュリー・ラーマクリシュナ、シュリー・ラーマクリシュナと言っていました。いつもシュリー・ラーマクリシュナのことを想っていたのですね。

1. **トゥリヤーナンダジの例**

トゥリヤーナンダジは高いレベルのヴェーダーンティストでした。

トゥリヤーナンダジは、「私のすべてはブラフマンではなく、シュリー・ラーマクリシュナです」と言っていました。トゥリヤーナンダジにとって、ドヴァイタ(二元論)もアドヴァイタ(非二元論)もヴィシシュタ・アドヴァイタ(限定非二元論)もすべてシュリー・ラーマクリシュナなのです。ブラフマンとジーヴァの関係で。全部がシュリー・ラーマクリシュナ、自分のすべての中心はシュリー・ラーマクリシュナ。それくらい深い愛でいつもシュリー・ラーマクリシュナのことを想っていました。

**<熱心に祈る>**

世間で生きるための方法として、「祈り」と「高徳の人との交わり」があり、その「高徳の人との交わり」の結果で、「神様への渇仰心」と「神様への愛」が生まれることを説明してきました。これから、世間で生きるためのもう一つの方法「祈り、熱心に祈る」ことを説明します。

**＜１＞神様に姿をあらわしてくださるように要求する**

**（１）神様は自分の身内**

お母さんは自分の子供や家族に対しては愛をもって面倒を見ます。けっして慈悲心で面倒を見ているのではないですね。われわれの最も近い身内である神様に対して「神は慈悲深い」というのはおかしい、とシュリー・ラーマクリシュナは言いました。

慈悲をもって接する相手は、他人です。慈悲をもって接してくれている相手に何かを要求することはあまりないですね。しかし、愛を持って接いてくれている相手、例えば親に対して子供がなにかを要求することはあります。そのようにわれわれも神様に要求をして構わない、とシュリー・ラーマックリシュナは言いました。

シュリー・ラーマクリシュナは、神様はとても近い存在であることをたとえ感じられなくても想像してください、と言いました。そのためにはまず、神様を愛し、「神様は魂の形をしてわれわれの中に住んでいるのだから、神様は家族よりも近い存在だ」と想像してください。家族は今生だけの関係だが、神様と自分の関係は永遠なのですから。

しかし、ただ想像するだけでは足りません。

神様、絶対にあなたの姿をお見せください、と要求しなければなりません。

困ったことに、神様が近い存在であると想像しても、われわれは神様がわれわれのために何をしてくれているかわかりません。個人的にサポートされているというイメージはなかなか出ないです。だからわれわれは証明が欲しいです。たとえ聖典に「神様はわれわれに一番近い存在である」と書いてあってもそれを読むだけではイメージが出ず、イメージが出なければ、実践もできません。その状態では進むことはできません。例えば、お母さんは子供が病気の時、寝ずの看病をします。食事も作ります。だから子供は自分がお母さんから愛されていることを知り、お母さんが一番近い存在だと感じます。このように実際の経験がなければ、一番近い存在だと感じることは難しいですね。

**（２）神様はわれわれが生きるためのすべての準備をしてくださる**

『福音』を書いたMさんのもとにはコルカタの（シュリー・ラーマクリシュナの）信者がよく集まっていました。そこでMさんは言いました。

水は神様の母乳です　　　☞（ニッティヤートマーナンダジ、‘M.-The Apostle & the Evangelist’）

神様が水も川も作りました。

われわれは水（神様の母乳）がなければ生きていけません。陽の光がなくても生きていけません。そして陽の光も水も、創造したのは神様です。

あるものを創造するには、生き物の関わりが必要です。例えば、大きな建物が小さな建物を作ることはできません。大工さんが必要です。

自然界にもそれらを創った創造主がいます。それは神様です。神様は生き物やわれわれが生きるために必要なものをすべて作っています。水、風、日光、土、など全部です。神様はわれわれが生まれた後にどのようにして生きていくかを考えて作っています。

**神様がわれわれのすべてを用意してくださる例**

（偉大なヴィシュヌ派の聖人で）バガヴァッド・ギーターの有名なコメンテーターであるシリーダル・スワーミーは出家する前は結婚をしていました。彼はずっとお坊さんになりたかったが言えませんでした。奥さんは赤ちゃんを産んですぐに死んでしまい、シリーダル・スワーミーはすべてを放棄してお坊さんになりたいが、これから子供を養うにはどうしたらいいか、真剣に考えていました。あるとき、そのことを深く考えていると、突然、トカゲの卵が屋根から落ちてきて、その衝撃で卵が割れ、その中からトカゲの子供が出てきました。トカゲの子供は卵から出るとすぐに、目の前にいた小さなハエをパクリと食べました。シリーダル・スワーミーはそれを見て、「生きているものはすべて、前もってすべて神様から生きるのに必要なものを与えられている」という考えが浮かびました。　おかげで赤ん坊の将来に対する不安はなくなり、彼はすぐに出家しました。

☞（『真実の愛と勇気』３４８頁L１～L１０）

**（３）シュリー・ラーマクリシュナは見えなくても、いつも信者を見守っている**

シュリー・ラーマクリシュナは体がなくなった後も弟子への愛は続き、生きている間だけではなく、死んだ後も弟子たちの面倒をみました。そのことによって弟子たちのシュリー・ラーマクリシュナへの愛はより大きくなりました。弟子たちはシュリー・ラーマクリシュナが死んだ後も、「タクールがとても近い存在である」と感じました。タクールの体は見えませんが、いつも弟子や信者のサポートをしています。

**シュリー・ラーマックリシュナが実際に守った例**

1. **ホーリー・マザーの例**

ホーリー・マザーがあるとき汽車に乗って移動していました。その時、金の腕輪などをつけていたので、タクールがあらわれてホーリー・マザーに「危ないので注意してください」と言いました。ホーリー・マザーのことをいつもずっと見ていたのですね。

1. **スワーミージーの例**

・スワーミージーがアメリカに発つ前に南インドに滞在していたとき、お母さんが死んだ夢を見ました。スワーミージーはとても心配になりました。そのことを知ったスワーミージーの弟子でアメリカ行きの資金をサポートしていたアラシンガ・ペルマルは、スワーミージーの家族に確認の手紙を書くとともに、スワーミージーに４，５０キロ離れた火葬場に住んでいる霊媒師のもとを訪ねて、お母さんの様子を聞くことをすすめました。スワーミージーは最初渋っていましたが、結局アラシンガ・ペルマルと一緒に霊媒師のもとへ汽車で行きました。霊媒師はスワーミージーの祖父、父、母のことを全部言い当てました。そして母親は元気だとも言いました。それからこの人はヴェーダーンタを広めるために近くアメリカに行く、シュリー・ラーマクリシュナがいつもこの人のことを見守っている、と言いました。シュリー・ラーマクリシュナはいつもスワーミージーと一緒にいたのです。のちに家族からの返信で、お母さんが元気であることもわかりました。スワーミージーはシュリー・ラーマクリシュナがいつも一緒にいることを知っていたと思いますが、ほかの人にそれを話すことはありませんでした。しかし霊媒師がそれを言い当てたのです。

・スワーミージーが西洋に渡ってからのことです。スワーミージーはキリスト教の司祭から嫉妬され、毒の入った飲み物を飲まされそうになりました。そのときタクールが「それを飲んではいけません」と言いました。スワーミージーもその飲み物に不信感を抱いていたのです、タクールの言葉でそれが確信となりました。

・スワーミージーはアメリカで毎日毎日、講話をしました。あまりたくさんの講話をしたので、次の日に何を話すか、というアイデアがないこともありました。そんな時、シュリー・ラーマクリシュナがあらわれて、「この話をしてください」と夜に話しかけました。その声を隣の部屋にいた人が聞き「スワーミージーの部屋に一体だれがいるのだろう」と思い、翌朝スワーミージーに尋ねるほど確かにあらわれました。

1. **ヒマラヤでの救援活動中のお坊さんの例**

あるラーマクリシュナ僧院のお坊さんがインドのヒマラヤの自然災害の時に救援活動のために山奥の被災地に向かいました。道幅が狭かったので、車を少しバックさせて、ほかの車が対向できるようにしました。そのとき救援物質を積んだトラックがその車を追い越して坂を上ろうとしましたが、積み荷の重さと足場の悪さのせいで滑り落ちて川に転落してしまいました。「もし、タクールが少し戻るように導いて下さらなかったら、トラックにぶつかられてわれわれの車も谷底に落ちていたことでしょう」とそのお坊さんは言いました。　☞（不滅の言葉２０１８年５月特別号３５頁）

シュリー・ラーマックリシュナが弟子をどのように個々にサポートしているかの例をたくさん挙げました。列挙した例のように個人的に神様が自分をどのように愛してくださっているか、サポートしてくださっている、ということが分かれば、神様が自分の身内と思うことができます。

皆さんは神様にサポートされている、と感じたことはありますか？

「あります」

私もサポートされていると感じた経験がいっぱいあります。タクールだけでなく、イエスやお釈迦様も信者を守っています。深く祈ると絶対に神様が助けてくださいます。

**（４）サットワのラジャス、サットワのタマスを使って神に祈る**

神様がわれわれを個人的にサポートしていると理解できたら、神様に「あなたは私の創造者です。だから、私の前にあらわれてください」と要求してください。それが一番の願いですから。要求をするときに、サットワのラジャス、サットワのタマスという性質を使います。シュリー・ラーマクリシュナのいうサットワのラジャス、サットワのタマスというアイデアはおもしろいですね。では、サットワのラジャス、サットワのタマスとは何でしょうか？

神様に関することはサットワです。この場合のサットワのラジャスとは、「神様、私にあらわれてください」と要求することです。サットワのタマスとは「神様、もしあなたがあらわれてくれないのなら、私は死にます」と言うことです。

神様の信者でも、困ったときだけ神様にすがり、そのときに神様が助けて下さるとそれで満足する人が多いです。しかしシュリー・ラーマクリシュナは、「神様は絶対にわれわれの前にあらわれてくださるべきだ、と考えてください。それが本当の信者の考え方です」と言っています。なぜなら信者の目的は神様を悟ることですから。

そのためには、神様に対する愛を増やします⇒愛が増えると神様が中心の生活になります。　そして最終の目的は神様を悟ることです。そこまで続けます。

（第50回『福音』勉強会　以上）